



BCSJ 100 周年に向けて決意表明

有賀克彦

Katsuhiko ARIGA

物質・材料研究機構 特命研究員, 東京大学新領域創成科学研究科 教授



日本化学会の欧文誌 (Bull. Chem. Soc. Jpn., BCSJ) は現在 98 巻を刊行しており, 数年後には 100 周年という記念すべきマイルストーンの時を迎える。100 年もの出版活動が続けてきたことは学会として誇らしいことである。ただし, 本稿ではその 100 年を回顧するのではなく, BCSJ 誌の編集長として今後の方針を宣言する。また, この場でそれに関するお願いを日本化学会の皆さんにしたい。

昨今, 論文発表の形態は激動している。近い将来, 研究者が論文発表時に体よく資金を搾取される事態が深刻化することを危惧している (多くの出版社の実質ハゲタカ化である)。したがって, 日本の化学者の思い通りになる学術誌を保持することは極めて重要である。その役割を BCSJ が果たす。BCSJ を日本の化学者が独創性の高い研究論文を安心して発行できる場とする。また, 国際性や外形基準 (インパクトファクター (IF) など) のレベルも担保する。昨年, Oxford University Press (OUP) との協業を始めて, 本格的な国際出版を始めた。ほかの商業出版社に比して OUP は学術出版を重視する商業主義に傾倒しない出版元であり, 最適なパートナーを選んだと考えている。

さて, 雑誌の客観的な外形基準である IF だが, これは直近の数年間の論文の被引用数で「計算」される数字にしか過ぎない。掲載された論文がいかにもすぐに引用されるかを反映している数値である。「いい論文が IF を上げる」のではなく, 「すでに評価されている分野のいい論文がすぐに引用されて掲載誌の IF を上げる」のである。ということで, 多くの雑誌で行われているのは, 直近のインパクトの重視によるバイアスのかかった論文選択である。BCSJ では, はやりの分野への傾倒を一般投稿には求めない。純粹にいい論文であればいい。独創性のある研究論文を安心して発表できる場を提供したい。そのような方針を打ち出せるのは, 日本化学会には宝の山ともいえるリソースがあるからである。BCSJ では日本化学会の学会賞などの各賞受賞者に受賞総説論文の投稿をお願いしている。評価されている研究の論文の被引用数は必然的に高くなり, IF 値向上を後押しする。つまり, 成功した優れた研究者の力によって雑誌の外形基準を納得するレベルに保つ。そのような条件を担保し, 新規なチャレンジをする未来の化学者が安心できる論文投稿の機会を提供する方針である。賞受賞者の先生方には, 受賞総説論文の執筆依頼がされているので, ぜひご協力をお願いしたい。また, 100 周年記念に寄せて国内外で活躍する研究者への投稿依頼も進めつつある。ぜひ, 皆さん協力してほしい。

先んじて成功して活躍する者の力がこれからの新しい芽を育てる図式としたい。自分たちの化学の世界は自分たちで守る。それが, BCSJ の役割である。

© 2025 The Chemical Society of Japan